



明治十年十二月發行

管内

西郷隆盛傳記



東京

羽田富次郎著

浦野淺右衛門版

通寶

1446

諸先生流義に依て作意ハ聊々替まども心ハ違
 不ぬ隆盛が蜂記以来の乱利を綴り童子加とる
 一けれども端無隆盛亡び一後ハ古似とる物
 語を耳新しくもるうゝへ其隆盛がこゝろと
 の幼々無徒大人也諸国修行の折うゝは當世名
 譽のぐう傑と知す交る旅衣もりとりく獨り海
 山越へ京地に出て皇国小義名輝大将と稱し逆
 の喜怒愛樂一々爰聞書為又も覽し備へ度賣出
 出陣新政の此小冊を厚徳意日本中を味方と頼
 筆のむちうつ摺墨し序文躰を尖門舎勢猛書如

隆盛一代史一序



隆盛一十言一

爰こゝ不し説し西郷隆盛にしやうりゆうせいが其その来きた曆れきを備そなへ尋たずねれば曰いは
 薩州さつしゅう為津久光君なつしんくわうきみの藩父はんちちハ西郷吉蔵にしやうきちざうとて為なり
 津家つげの軒卒けんそつたり其その性しやう至いたりて實直じつちくよて軒けん之の者もの
 二ハ言こと垢あから志こころく文武ぶぶ兩道りやうだうの道みちを心こころ掛か己おのれお
 ゆるぎの五十いそふ餘あまり志こころ時妻ときつまふ先立まきだてれ幼いさる
 三四人よつにんりの子供こどもを養育やしよくる志こころ朝暮あさゆふ家貧いへちぢ志こころく
 も是これを苦くるゆる正ただる少すくく内職うちやくふハ及および
 ども其その透すふハ子供こども等らをりい集あつて唐から日本にほんの
 文ぶんを教おしるふ皆みな惣そう明めい利りふして一いちを聞き
 万ばんを知るの性しやうあり殊こと更さら惣そう領りやう吉之助きちすけハ世よの

常とこの童わらわべと異ちがひり骨違ほねちがひあて七歳しちさいの頃ころ
 並ならぶの十二三歳じふにさんさいのりらあま殊こと更さら言こと数言かずごんす
 小兒せうにるがらも大鵬たいほうの心こころありて力ちからまやう極ごく
 りあく又また二男になんありりるハ生質なまぢ仁にふ志こころて柔な
 和わとぞ聞きく三男さんなん小平せうへいハ幼いさるけれど物ものと
 不ふ賢けんく未子みこハ女子おんなこよて顔貌かお含こめる花はなの如ごとく志こころ
 吉蔵きちざうハ能子のこ宝たかららを持もてり志こころと庶しや兒こ為なす諸しよ
 臣しん等ら浦山うらやまぬものこそありりり爰こゝふ又また領りやう
 主ぬし久光君きうくわうきみハ公事こうじとふよま御城下ごじやう御道行ごだうぎやうの
 折おりるり御賀籠ごがごの内うちよま道みちの辺へまを見み賜たま

ふ小童子数多集りて大路の砂小文字を書
頭志大ひ小義論ふ及びけり久光君も元よ
好せ賜ひける文書の義論と聞賜へ何
小をりる去りべの間答ふ及へるやと賀籠
のうちよるいお見賜ふ一人の童子の
い、ける様ふ汝聞朋友の朋の字ハ月を二
つ並ぶると是如何道意るそや汝能氣置
るさハ我小説て聞せよといふ一人の童子
うち笑ひてい、ける様ふ我も野説の愚言
言正しき小ハあら孫ども月の字ハ両月の

二字ふ似て而も正しりるぞ朋の字ハ月の
字二つ並ぶて斜小中ハ点を足朋の字ハ
りくの如志と砂を以て文字を書志を久光
君とくよ是を御覧おて御供まじりま付
られ童子をして御賀籠小近付賜ひ汝何者
の小倅るや童子拜志ていへらく我ハ殿
様の御内ふて名も無輕卒ふて西郷吉蔵が
倅同名吉之助と申者るま汝今見つる小十
歳小もたらぬ身で文字の教論實小唐の劉
晏小もあつるま志奇るる童子蛇ハ一

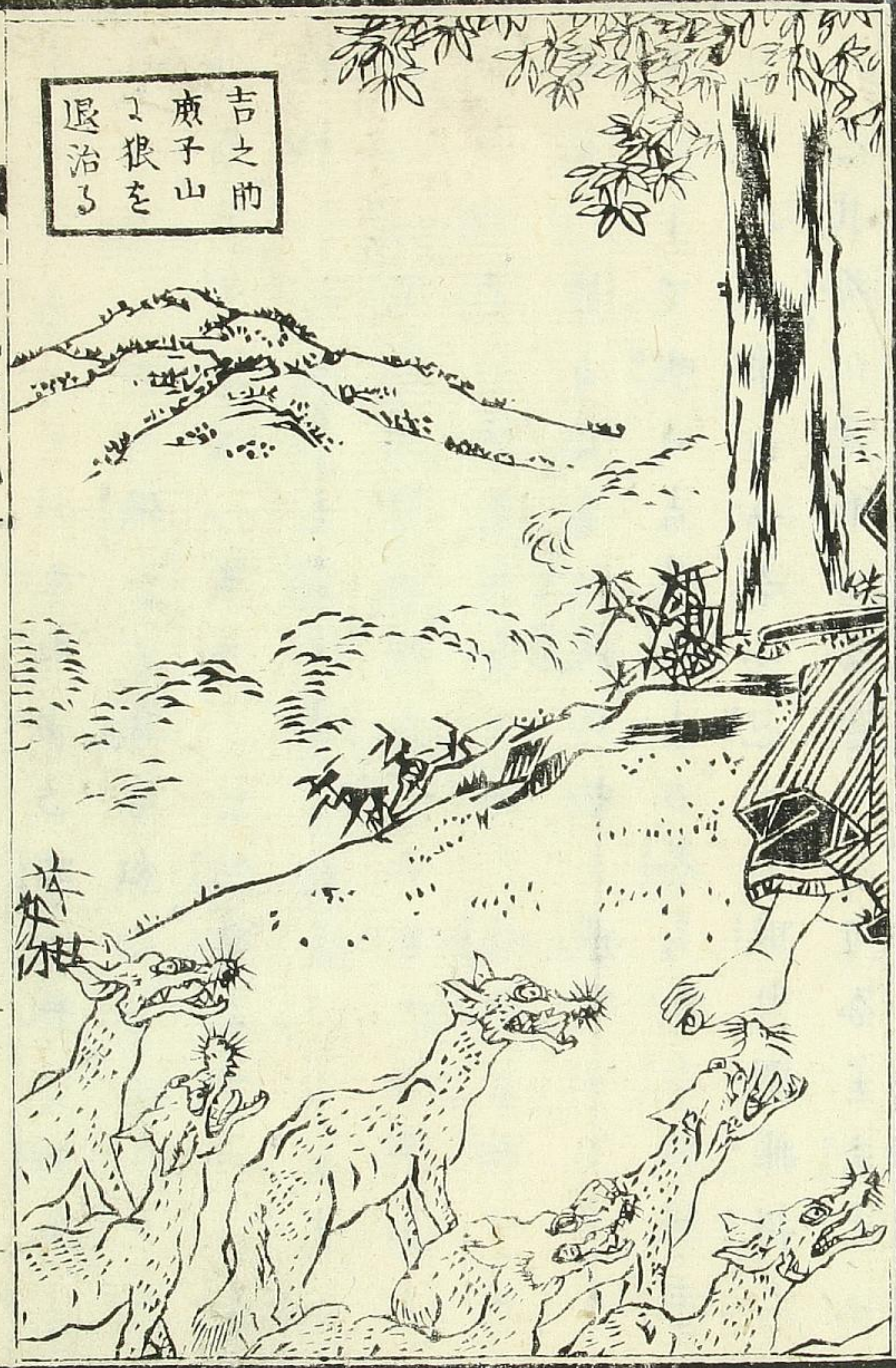
寸又志て榊檀ハ二葉ノ香一汝成長の後
我小仕へて忠勤を烈むべ志と御手づら
御刀を下され其余の子供等も御鼻紙を
賜りし小皆一同小拜礼るす折志も殿小ハ
御賀籠早められ入城とこそハるる小り
然小此と誰言とるく庶見萬一倍の評判と
るる皆吉之助を志て神童とこそ稱せとも
波又少しも不ころ色るく小見けれども礼
義正若く家中の諸臣小合ふ時ハ身をへ
下して再拜志諸人の人愛言厚く殊更親

小孝順深く兄弟を相哀と父小身小兄弟多
く家貧志らあればこそ少しも親の助を
さんと吉之助十三歳の頃小るん同国の庶
子山小薪木を拾んと弟小平を伴ひ朝間た
きよア至りしが頃志も秋の末方木との
梢も紅くて錦色とる山畑山弟小平ハ此所
波所の木實を拾ひて餘念るく遊小實の入
伊賀栗を討落志てハ樂志める折志を片へ
小吉之助ハ常小好める劔道の我腕を堅ん
と立木を合手小良々惜く討落志る枯枝

卷一ノ一

四

吉之助
庚子山
狼を
退治す



隆盛

隆盛



をうい集めてハ束ねある時や秋の日あり
さへ短く西へ傾きて鳥もねぐらふとどり
あうハ吉之助ハ集めたる枯柴を脊らふお
ひ弟小平が手を引て庚子山を下らんと二
足三足歩志が身ふあむ秋の木枯や俄ふさ
つと吹来目梢をみるう砂を飛志言物すご
く見へけるとを一疋の狼と飛来りてりり
々として吠ると見へトが忽ち数千の狼来
り吉之助弟をるう小包とて取り圍飛掛ら
んと其勢ひ身毛もよどつ斗りる目去ども

不敵の吉之助少志も驚く景色るく弟小平
を小脇ふりい辺腰刀を引抜つ頭へのうへ
お立ちろざ志少志も動せず坐志るう数
の狼と砂を掴と四足をちみみて吉之助が
頭へのうへを飛んとするお切先下りよ豁
らを破ら志我と我手お狼とハ皆残りるく
死でりり是吉之助が一謀惣おて狼ハ人を
取目喰ふお早くも人お飛付て取目喰ふも
のるら屯と聞已飢お忍びむ人を喰んとす
るお砂を掴とて道行人の頭べを飛越砂を

隆崎一不言

六

そ、ぎて目つぶ志どるし其時み及んでハ
旅人の肝を令去大ひ小驚きて例さるハ則
坐小飛付我腹小葬と聞就中吉之助ハ小年
といへども常ふ人の言を能氣置る志掛
る折小も思慮深刀を以て頭べ小立狼を
志て謀さしハ感むる小残王有啓しハ叔
置つ其日も暮不及べども吉之助小平のも
どらさるしハ父吉藏家小あり弟も殊
の外る案志よて我兄うへを尋ね小行ん
と一腰不つと足を早め庶子山志と急ぎ

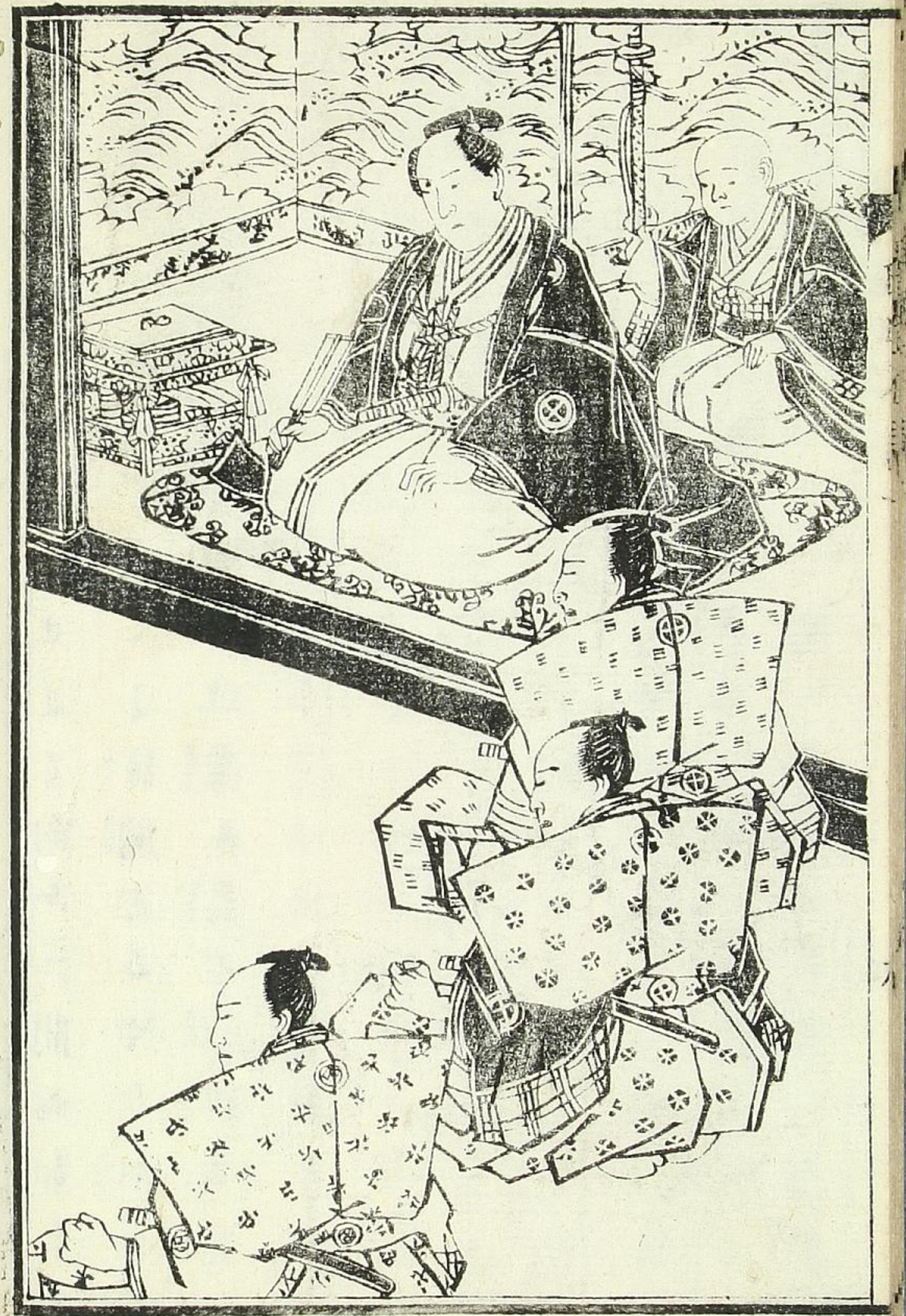
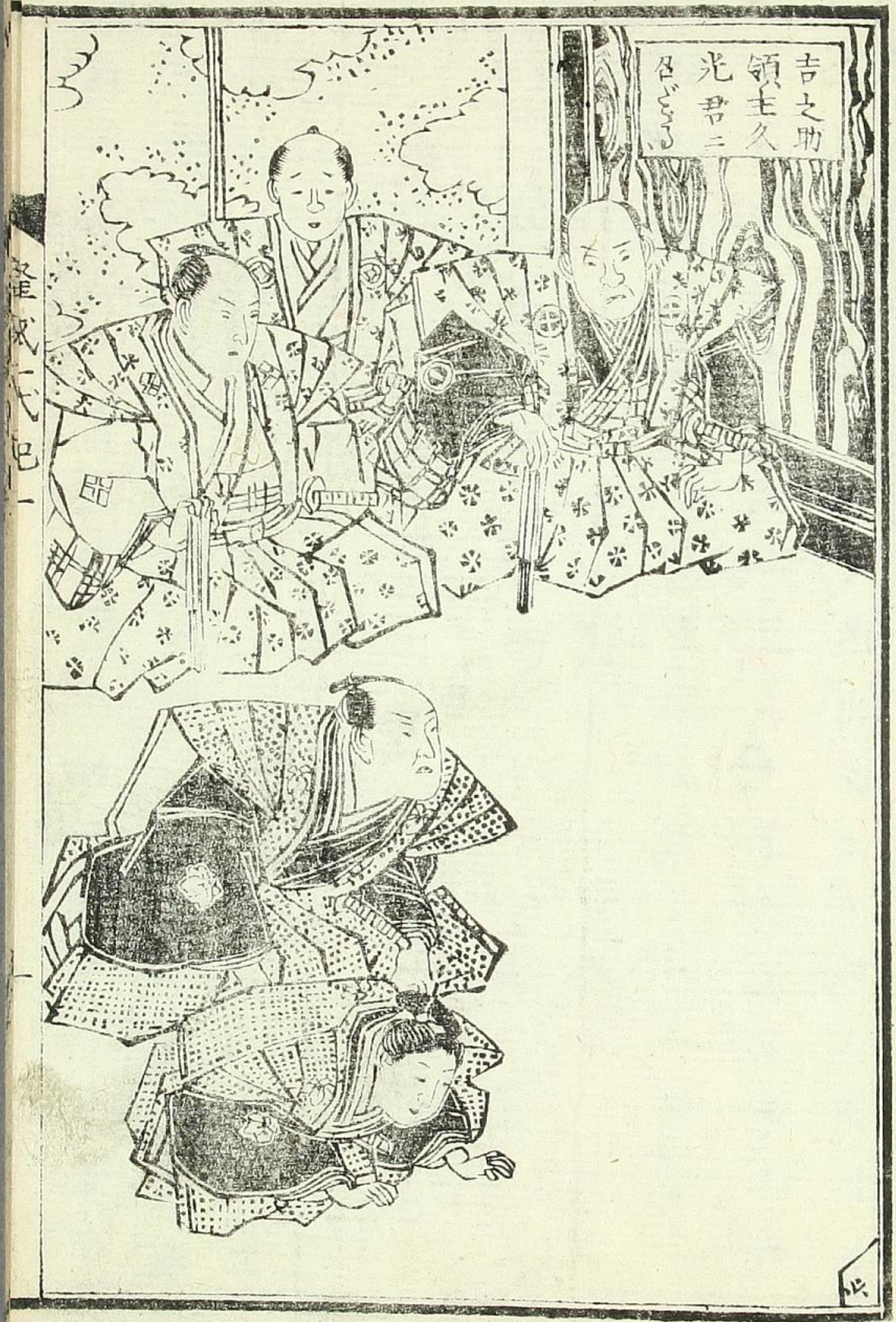
ける折りら向ふへ吉之助成よ王高く焚木
を荷ひ幼血盛りの弟と二三疋るる狼を
繩小緘げつ兄弟が忍ひくと引來るを近付
まハ見てあれハ兄弟るが真身供赤よ深
とるあさまお二男ハ大ひ小驚ついろる
る子細と問ひけれハ志りくのとありて大
ひ小衣類を穢しと王といふ小二男も其恙
無を喜び親人とのふ案志よて少しも早く
還了賜ひと兄弟三人うち連立狼三疋引
來るを未だ暮さぬ大摩時秋の日暮の世

話敷もうち忘れてハ東西南北よりけさ
さるての諸見物小兒小似ぬ大物をとう
て御身ハ獵セしと見入る人ト小誓ふり去
程小兄弟三人ハ破狼狄を引摺つ様ふと暮
小及んで我家小至り親人只今還りしとい
、声聞々て親吉蔵ハとよおそしと未の
子小火則燈して立出つ三人んの子供を見
るよても其あてさまの興るをいウ成子
細と尋ぬる小吉之助ハ賢くも今日戻り
の延りる小親人小御苦勞掛其罪言も輕う

と祿と庚子山よて謀ぢも狼小出合とる
有し次第を物語まハ親吉蔵ハ聞度毎且驚
さ且あされ又子供ホガ身小無恙を祝ひ年
小似るさ吉之助ガ早束の一謀猛状あよと
を退治してそれつゝ我家小引來るハ言違
しと働らさと親恥敷思ふものウら吉之助
ハ父日向ひ我兼言を吐小ハあふ祿と此程
父小ハ御年召れ身うち程も令しとウ今
日をウらむも手小入し是る毛物を包丁
る志ね酒の肴ふるしとまじバ身うちの程

もあと、まゝん望に賜へハ我ウ、よつり
料理を仕さんといふを聞て親吉蔵是
ハ能所み氣の付とり期迫大獵志とるを
我内斗りで食すとていりてこれの継ぬ
べし汝が働ふに御近所小福分るして祝を
せん是ポンヨ庶々る品を差揚る小器持さ
んて参ふれよと御近所様小知らせよとい
ふに早く小平ハウけ出し此所波所へと
ぬれあるくふとくよと知る吉之助ウ今
日の得もの、働らさるを祝ひがてら行ん

と思ふ折ウ知らせよて向ふ三間兩鄰
近所ウつへさてんくよ目開ぶるやウ血小
をち皆携へつ西郷が住居を差て行程は聞
傳へてハ下々の中間小者小至る迄我も肉
物貰んと皆一同小走るよさ福分されてハ
祝ひ合是吉之助が賜のあり一口ありとも
食しるハ武男の程ふもあやうるべしと皆
うち揃ひて還るり去バ吉之助が狼を退
治しよと一家中小分るく此と評判言高く
上久光君ふも不聞べし吉の武男の程を



感^ス賜^ヒひて吉之助御召出^ルの由^リて家老^ト
 伊集院某^ヲを以^テて吉之助^ノ父吉蔵^ノ組頭^ト付添^ス
 ひふて御召出^ル相成^ル御感^ノの御言葉^ヲを掛^ス
 せ^リれ先年^ノ公^ノの御用^ニふて行く途^中をウ^リ
 本^ノ文字^ノの教論^ヲ今^ニ戯^レれとハ言^ハる^ガク^ク庶子^ト山^ノ
 又^テ数多^クの猛^ク狄^ヲを退^シ治^スと一家中^ノの小兒^ト
 ぶ^ク烈^トも成^リ可^ク段^々其^ノ方^ニ一^ツ子^ト吉之助^ト中^ノ小^ノ
 性^格被^シ仰^付御召出^ル相成^ル候^ト仰^セ渡^レ被^シ
 う^バ吉蔵^ノ吉之助^ノ御請^ヲを申^奉呈^シ面^目身^ノ小^ノ残^ヲ
 王^ノ祝^ヲお^と限^リみ^く退^出を^とを致^サれ^ける

爰^ニ及^ビて吉之助^ハ小^ノ年^ノ十三^ノ歳^ノ頃^ヨリ
 久^ク光^ノ君^ノ中^ノ小^ノ性^トと^スる^ヲ忠^ニ勤^ニ忘^レり^みく朝^ノ暮^ノ
 光^ノ隠^レを^送呈^シり^テ吉之助^ハ十八^ノ歳^ノ頃^ヨリ
 父^ノ吉蔵^ハ風^ノ心^トも^ちよ^リ老^ニ病^ヲ相^發し^テ喰^フ
 と^リも進^ムぬ^ニ兄弟^ト大^ニひ^ニ驚^カさ^テ醫^師薬^トと^ス
 抱^キせ^りが神^灸薬^師の印^もみ^く今^ハ頼^ミ少^ク
 と^りり吉蔵^重き枕^ノ元^ニ子^ノ供^四人^ヲを呼^ビ
 近^ク付^テ汝^ノ薄^命よ^リて幼^キよ^リ母^ノ別^レ今^ニ
 ま^又我^ノ別^レる^ニ條^ニ二十^ノふ^トぬ^ニ汝^ヲを初^メ
 子^ノ供^ノ本^ノ意^ヲみ^く思^ハ己^ノ未^ダ未^ダへ^ノ女^ト

隆盛二十言一

十一

の子ハガんぜもあはぬ身よりあはれ年瑞も
行ぬ男の手小育てあぐるも言便るし彼ハ
縁者の児玉が方小大人とるる迄あづけて
とべ親無後ハ兄ハ弟をあわれ之弟ハ兄を
親と思ひ必ず差圖ふもとらすして兄弟と
も小和順る志中能暮すが我への経養況ん
や武門よおひておや忠義の二字を忘るゝ
とるく主君の為小ハえぢをも厭ハず識者
の誹を受るとも乱離の人とるるゝるり
と言べきよしハ是のこといふ声へさへも

志己が述て次第くまよこ行其明の朝眠
が如くいき絶へと至兄弟爰よりち寄まで
うくごハ兼てしなぐらも爰小特を失ひし
浮との虫の父と泣年の終りや魂祭至外小
ハ立る門松もめいどの行の一里塚行て返
へしぬ哀別離苦数行の泣ふりさくれり
至扱てあるべきよあはれぎさバ縁者を初め
近所も父が病死のよしを知りせしりバ
吉蔵ありし時よ至も常まつさ合能人まで
真心ある者ありせハ皆とりぐよりけ集り

隆慶一代記

三

年瑞も行ぬ兄弟を不便とこそ思ひけん皆
 まめどちて念頃又葬式りとの如くある
 喜所南林寺に葬りけり是ハ嘉永二年十二
 月のとふるん明色ハ嘉永三年新玉の春を
 向ひ西郷が兄弟忌終て後次男ハ西郷吉蔵
 家督僧ぞくを被仰付吉之助ハ是迄の通
 中せう小セウ格よて出頭よ及を述りつ
 と思ひける様ふ我よまく武士の瑞と生
 色九州一り国ふて朽果んよ天下のがう
 けつと交を結ひ普天の下よ我名を楊ん

と心一つよ一交るよそが書面を認め主人
 久光君へ頼ひしりハ君よも文武を好之賜
 ふ御生質るれハ珠の外御祝喜在し早東御
 水引被有旅金着千を賜りしりハ吉之助有
 難しと頂戴るし家内のハ弟二人よ頼こ
 置其年二月の初めよ足旅行の用意よ及び
 急ぬ旅のとよしあれハ岩根の雪も解漆て
 萌出る野辺の若草ハ春色稍催つ、し女が
 雛を祭るてり弥生の月とありければ今ハ
 旅行も言安しと當日好道吉日ハ薩摩の国

を旅出一つ驛路曉の鈴の声今日も旅路ハ
急がねと草分衣服高く甲斐敷も引らげ
日向延岡うち越て赤の大望大隅と正八満
在伏拜見八代を出て熊本を振りさけ見れ
ハ河蘇のくね山路ゆり、る志る雲の古郷
よ残す兄弟ハ我が便義を松るがと千廣の
海を越へて行古さと返る雁ふと傳をりあ
頼んと思へと我も定めるき今日ハ筑後ふ
日を暮せと明日ハ秋月筑前の轉多の沖も
渡海して西海道も早や過ぎつ野暮山暮遠

くも来つ旅寐夢結びゑず押明方又出れハ
四方の八重さりとちこめて雉子の声音の
跡埋む左手も右手も百千鳥柳櫻をこと交
て都ぞ春の末つ方東海道の驛初め品川宿
へとつさよりりさるるり又吉之助ハ道を
早めて関東の地又足を入東西を詠むる
ふ今徳川の政事専ら武を失ふて花びよ不
こり下萬民上を見習ふて只びを争ひ居家
道行人の風俗其びといるといふ斗り無
又士農工商とも往來の集数絶問るくたん

昌聞さよ増りげよ武蔵野原と聞へりハ行
 てい十郡ふまよがまて月の入べき山もふ
 尾花が末よ掛ゝる白雲とち方主もよ
 ませ賜ひしが東ハ隅田川西ハ秩父が根北
 ハ荒川南ハ玉川の流れよ續き彼よげ水の
 行末とりあやまよる去ハ草よま出て草よ
 没草の枕の旅ねよハ路問里の遠りる
 んと歌詠人もありんると聞し今ハ引替
 へて酒樓ふ絶ぬ糸竹のげふ泰平の腹鼓と
 獨りぶつくとぶやとつゝ行への方を見ん

へよバ道行人をいこよけんよつを張
 掛け茶屋あり是幸ひとつと入て彼床机
 小腰うち掛主よ向ひて何時るやと問
 ひみろぐ草鞋の土を踏挽主が出す茶碗の
 湯を一口吞で傍へよ置主ハ元の圓坐よも
 どり空よ指さし言ける様ふ今かと聞へり
 あの鐘ハ羊の刺と思ひよ日ハ赤ど南の
 真中まりげよ此頃ハ日小増して長日よこ
 そハありよるり夜ハ短くあるみれよも
 旅行をなさるハよる自分日ありハよりと

重助えり
らむも道
みて吉之
助におふ



午の刺過と斗まであるればやるく憩せ
玉にるべし旅客ハ何れへ行玉ふ問へバ
うみづき某ハ西国の者るましが都の手振
り好しく此度初めて下りまきげは武蔵野
ハ聞々小増り春ハるがめも言ハ更なる富
士山獄の晴築波根の遠霞隅田の堤小櫻と
やう聞及びてハ田舎人も志とふといふも
むべるまきさハいへ我うも東路は初めて
の旅るれば何れを先に見物せんやと語る
折うううくと海面ひく芝の鐘さをが

長き春の日も申の下刺とるりーらバ身
 をおこしつ、帯を結び草鞋のひも子心を
 好否左行んと立あがり主ト茶代の錢を
 取り宿借先を主ト問ひ立出て行後よ
 兄君志をゆく待賜ひと声りけりて吉之
 助ハ後辺の方をよくとる折西郷様の若ど
 んふどふりて東よ越ましやと間人物ハ兼
 て知る薩摩の国の領地ある農夫重助
 てありけれバ吉之助ハ見てびつくり是ハ
 思ひさや重助どの御身爰であおふとハ

夢の浮世といふるが夢でハ若やあふぬ
 うと類は顔をうち守り先一外の兼精を述
 其後重助の問ひける様ふ誠と思ひもよら
 ぬ御對面君東でおふこの神なりぬ身の
 不思議さよ君の東よ下されハ定めし様
 子のあるとるらん聞りまなくも思ふめ
 り又僕り身取とて一くどりの物語り耳
 不入度思われと爰ハ往來殊更御足も草び
 れつらん見りる、如く日の入るれば今宵
 ハ我り主トとる王奉公先であるるれど我

ガへやよて夜とともい語るありさん参る
れよといふを答へつ吉之助是添るさ汝が
真心とち不案内の某るれバ何迄を宿と
いふを知らむ汝はおふも我幸ひして行先
ハ何迄あるされバとよ我今主ととのめ
るハ當世東て評判よき博學多才者らのと
みらづ最心深るどんる様所ハ東の真中
る日本橋の西岸よて下條通信といふ醫道
であるといふを聞よ大ひよ祝ひ博學多
才とあるらるハ我も取てハみめよりなり

否左さるバ汝が進めよ任せる程今宵ハ其
家小世話とる翌明日よもるさバ汝よ醫
先生へも引合セ對面るよ其うへて我筋
生をもろちあり何らのとをとのここと
べと二人連立足を早め其日も暮て六ツ半
頃重助が奉公るを下條通信が住居よこそ
付けれバ先吉之助を伴ひて重助ハつと門
内よ入我部屋を引明つ吉之助を入置て其
身ハ奥よ入主人下條よ頭をさげ只今還り
仕りぬ先様の御返事ハ委細承知と述べけれ

010190508094

王道信聞て討うるづき遠路の所御苦勞を
 定めて汝も草ひれつらん早行て休め
 よと主が言葉又重助ハ御機嫌様ふと火と
 くをともし我部屋差て来程ふ吉之助ハ待
 もうけ勝手知る祿と最せよを部屋のち
 るるあんどをさぐりいどして火そくを移
 きた時や重助消炭をめぐりつるつりて火鉢
 又入れ火を吹付る折こそあは奥の方にて
 重助と呼ぶ、ま、又頭べを返へしを折
 悪敷奥の御用久振での物語ハ次巻の語明

明治十年

月日御届

東京

賣捌人

福田熊治郎

長谷川町千蔵

著人

羽田富次郎

第六大區八區本所

外手町二十二番地

出版人

浦野淺右工門

第十七大區二小區寺

鷺村四十五番地

森屋治兵衛

馬喰町二丁目

賣捌人

惠比壽屋庄七

照隆甲丁

